

宗祖弘法大師青葉祭祭文

敬うやまつて、真言教主大日如来金剛胎藏两部界会諸尊聖衆、

殊ことには宗祖弘法大師、般若理趣等甚深妙典、総じては仏

眼所照一切三宝の境界に白して言さく。

夫れ惟そんみれば秘密曼荼の法門は現証仏果の直道にして

密嚴仏国の大旆は濟世利人の標指たり。

斯の故に宗祖大師は大慈憐閔の皆を廻らし玉い、衆生

の苦患を救い賜い、大悲の哀惋を催しては、閻浮加持の

行法に勤しみ賜う。誠まことに是れ撰化衆生の妙行に非らずや。

茲ここに本日、秘教請來の宗祖弘法大師降誕の嘉辰を迎え、

度みて東方山安養寺觀音堂を莊嚴し本尊觀世音菩薩宝前

に香華供物を献じ奉る。顧かえりみるに、宗祖弘法大師は父君

を佐伯之直善通卿、母君を阿刀氏玉依御前として出生。

乃ち光仁帝の宝龜五年六月十五日讚岐の国屏風ヶ浦の地に

おいてなり。奇くしくも真言第六祖大広智不空三蔵和上の

遷化の時なり。正まさに大師は不空三蔵和上の再誕なりといひ伝

えられるも宜むべなるかな。

大師は志こころざししを立てられ奈良の川原寺別当 勤操大徳の法

袖しゆうに入り、二十四歳にして世界的名著「三教指帰」を著わ

し儒教、道教、仏教の三教にわけ入り、遂ついに仏道への入門

を宣説せんぜつされる。

延暦二十三年万里の滄海を渡り、中国・西安に惠果阿闍

梨りに随ひたがい三密の法門を普く相承して大同元年わが国に

秘密曼荼の法、即身成仏の秘教を日本扶桑の土に伝え賜う。

昨年は高野山開創千二百年を始めとし諸霊場における大

師への高揚が広まる。真言宗の立教開宗は京都の官寺東寺

を根本道場とす。仏教が大師によつて朝廷から一般庶民まで

広く布衍ふえんせしは日本仏教の大展開と云うべきなり、

道なきところに道を橋なきところに橋を なかでも讚岐

満濃ヶ池の修築は大師の土木工学の偉業を天下に示す大事

業となる。さらに貴族の学校はあれど庶民大衆の教育機関の

全くない時代平安京に綜芸種智院を開設、万民を愍れみて

普賢の悲願に住しげいしゆちいんされしものなり。然れば即ち如来の教法を

も うじょう こんめい ぜんしんぜんれい っ みぎょう
以って有情の混迷を救い、全身全霊を尽くされ、密教の門
いよいよけつじつ ころぎょうひつぜつ つく がた
愈々結実す。誠に偉大なる大師の洪業筆舌に尽し難し。

ときあたか せいしん ひか
時恰も宗祖大師降誕の聖晨を控えて、当山安養寺は、

けいさん ほんかい みやくみやく しゅうきょうせいめい
降誕を慶讚し、大師の本懐と脈々と伝わりし宗教生命の
そんげん おくねん ほうおん おんたく たてまつ せきせい
尊厳を憶念。報恩、恩徳に報い奉らんと欲し。赤誠を

とろ たん し さいてん こんしゅう
吐露して丹を敷いて祭典を厳修す。

しんりよく したた きれい ほこ しょうび
新緑の滴るなか華麗に咲き誇れしシャクナゲに賞美して

どうしんどうほう つど れいしゅう こうしゅう
同信同朋が相い集う。鈴鐘を鳴らして詠歌を高唱し、僧俗
ひととなつて法筵を結ぶ。

おも さきが
惟えば当山のご詠歌伝道の先駆けは、来年一月に七廻忌
を迎えし故直子寺族夫人なり。大師への信仰篤く、報謝に

じよちよう
深く、こよなく住職を助教す。

きょうふうかいこう けつひ けんご
熊谷俊亮住職は最愛の夫人を失ない途方にくれしも立ち
上がり ますます大師信仰への教風恢宏の決意を堅固す。

くりき あまね だいはんにや ししん ぶくじゅ
本日もその功力を普くとする大般若を至心に読誦。大師の
いくん したが えいごう やすら あお
遺訓に従って永劫の安ぎへと導き賜う。仰ぎ願わくばご参詣

の各家において益々の勝計を廻らして無比の加護を給わらん
ことを。

重ねて乞う。

世界平和

ばんみんぶらく

万民豊楽

ふううじゆんじ

風雨順時

五穀豊饒

しやうりゆうぶつぽう

紹隆仏法

ばいぞうほうらく

倍增法楽

檀越安穩

ないしほっかい

乃至法界

びやうどうりやく

平等利益

平成二十八年五月二十二日

京都府向日市寺戸町

亀光庵住職 土口哲光敬白